

ブルーストとジェネリックスキル ―「国際化と異文化理解」の実践例―

高橋 梓

1. はじめに

報告者は近畿大学法学部で主に一年生を対象とする教養・基礎教育科目「国際化と異文化理解」を担当している。講義内容は「異文化」をテーマとするという条件以外は広く担当者に委ねられており、本学では様々な授業の取り組みがなされている。

この講義の中で報告者は自らが専門とするブルーストをテーマとする 15 回の講義を組み立てたが、担当初年度の 2016 年前期の受講者の反応は非常に厳しいものであった。報告者が紹介したブルーストの文学世界や、ブルーストを主軸として紹介した絵画、建築、音楽、その他フランス文化の様々な魅力が受講者にさほど伝わらず、講義ではモチベーションの低さを原因とする遅刻・居眠り・欠席が繰り返された。

報告者は 2016 年 12 月のシンポジウム「フランス文学を次世代へいかに伝えるべきか」(神戸大学)でこの問題を分析し、日本の高等教育の構造やキャリア教育と関連付け、学生のモチベーションの低さを理論付けた¹。現在の大学教育は高校までの教育や社会と連続しておらず、大学での学問が将来のキャリアに結びつかないため、授業内の知識獲得に対するモチベーションが高まらないのである。キャリア獲得に繋がらない以上、授業は単位取りゲームと化し、学生は効率の良さを第一目標として、最低限の力で単位獲得を目指す。これは学生が不真面目なのではなく、現在の教育とキャリアの問題が引き起こした進化の一形態として理解することが重要であろう。

こういった学生たちと対峙し、文学教育を実践せねばならない我々は、現在の日本の大学において文学を教育の素材とする意味そのものを捉え直す必要に迫られている。このような課題に取り組む際に、我々が意識せねばならないのが、昨今の大学教育研究において重要視される「高校・大学・社会の接続」(トランジション)である。大学を高校と社会から隔絶された空間として認識し、学生にフランス文学の知識を獲得させることは、決して意味のないことではないが、高校まで獲得した知識を文学の力を借りて増大させ、社会人としてのスキルに結びつけることもまた意義深いと言えるのではないだろうか。

報告者は以上のような問題意識に基づき、2016 年度後期の「国際化と異文化理解」において大胆な授業改善を行った。本稿ではその要点の紹介に加え、セメスター内の最終的な成果と、現在に持ち越されている課題、さらなる授業改善の方向について報告する。以

下、まず現在のトランジションの議論を整理し、主にキャリア教育の観点から文学教育の可能性を抽出する。次いでブルーストがどのように大学生のキャリア教育と結びつけられるか、報告者の講義に基づき様々なテーマを提示する。その上で、諸テーマに関する大学生の能力開発を可能とする授業デザインの実例を紹介し、これまでの成果と今後の課題を示したい。

2. トランジションにおける文学教育の可能性

本節では現在の大学教育研究の領野においてトランジションが重視される背景を整理した上で、報告者の授業改善の方向性を解説する。

日本におけるトランジションの議論の先駆者の一人である溝上慎一は、1997 - 1999 年の「大学生 1200 人インタビュー調査」によって「学業」という要素が予想以上に大学生の自己評価と関わっていることを明らかにした。自己評価の肯定・否定に関して、学業を判断基準とする回答はどちらも 40 パーセントほどであり、その他の項目と比較しても突出している。ゆえに学業に対する達成感や充実感の有無が大学生の心理に大きな影響を与えていると考えられるが、ここで問題となるのは学業の重要性をわかっていながらも結果が出せないタイプの学生である。このインタビュー調査の回答においては、「自分が将来何をやりたいのかがまったくわからない」「授業内容が求めているものと違う」といったものが頻出している。言い換えると、学業をしっかりと行える実感がある学生は、「将来の見通し」を明確化している場合が多い²。

実際に調査結果の分析においても、将来の見通しを持ち、そのためのプロセスを理解し、準備作業を実行している学生（理解・実行群）と学業に手応えを感じている学生の比率は相関関係にある。このことから溝上は「現在のライフ」と「将来のライフ」という「二つのライフ」が接続関係にあることが、学習の動機付けに大きな影響を及ぼすという見解を導き出した³。

大学の授業内において学生の「二つのライフ」が連続する例として、医学部や教育学部など、大学の学問と将来の仕事が連続性を持つ機関のカリキュラムが挙げられる。しかし文学部や法学部といった大半の学部には所属する学生は、将来と日常（学生生活）が連続していないという問題を抱えている。このような状況を改善するために、高校→大学→社会の移行を意識し、大学を社会に繋げる空間として捉えるトランジションの議論が重要性を帯びる。すなわち大学と社会の連続性を意識させ、「二つのライフ」の連続性を見えやすくすることにより、学生が授業を受けることの意味を実感し、モチベーションを高めることが可能となるのではないかと考えられる。

報告者は 2016 年度前期の授業が終了した後、溝上によるトランジションの議論を知る

こととなり、研究フォーラムや関連書籍の分析を通じて学習者にとって社会との繋がりを実感できる授業のあり方を模索することとなった。そこで注目したのが「汎用的技能」（ジェネリックスキル）である。1990年代以降に先進経済国において学生が獲得することを目標づけられたエンプロイアビリティ・社会人基礎力・就職基礎能力といった諸概念は、2000年代以降に日本にも移入され、特に大学教育では多種多様な職業に対応が可能なジェネリックスキルに注目が集まる⁴。2000年代以降、国内の大学や高校ではジェネリックスキルの実践が繰り返されることとなる。報告者はジェネリックスキルの概念整理に関わり、その育成の普及に努めてきた河合塾を母体とする研究会 Enjoy Learning Forum 東北での勉強会や研究発表に参加しながら、プルーストを扱う講義とジェネリックスキル教育を関連させる方法を模索し始めた。

報告者が学んだ河合塾教育研究部の理論図式に従うと、この能力はリテラシーとコンピテンシーに大きく二分される⁵。リテラシーは「実践的に問題を解決に導く力」であり、特に知識を活用して問題を解決する力と言い換えられる。習得した知識を活用することで育成される能力であり、具体的には情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力などを指す。一方のコンピテンシーは「周囲の環境と良い関係を築く力」であり、経験を積むことで身についた行動特性であると言い換えられる。これは経験を振り返り意識して行動することで育成される能力であり、具体的には対人基礎力（親和力・協調力・統率力）、対自己基礎力（感情制御力・自信創出力・行動持続力）、対課題基礎力（課題発見力・計画立案力・実践力）となる。

ではこのジェネリックスキルを大学機関においていかにして養成することが可能となるのだろうか。例として昨今の大学教育に導入されるアクティブラーニングや反転授業といった教育メソッドは、対課題基礎力や対人基礎力を高める効果が期待できる。本報告においても後ほどアクティブラーニングの手法を用いた講義実践と成果を提示する。

しかしジェネリックスキルの養成は「メソッド」によってのみ可能となるものなのだろうか。企業の人材育成を研究対象とする中原淳は、大学での経験が企業での基礎的能力に関連することを指摘している⁶。すなわち社会生活で問題化する課題の遂行や他者との協調といった経験を大学のうちに済ませておくことが、社会で求められる技術を習得する上で大きな意味を持つと考えられる。だが社会に類する経験を授業内で行うことは困難であることは言うまでもない。高野良一は学生の「大学生活」に目を向け、アルバイト・ボランティア・サークル活動といった経験の重要性を指摘する⁷。しかしながら大学生の私生活をマネジメントするというカリキュラム設定の是非が問われるであろうし、授業時間の改変など多様な問題を含む提案であることは間違いない。

以上のように現在の大学教育におけるトランジションの議論を概観し、主にキャリア教

育という観点からジェネリックスキルの重要性を指摘したことで、我々には次のような課題が残される。すなわち「大学教育においてジェネリックスキルを高め、社会へのトランジションを行うことは可能か」という問題である。そしてこの課題の鍵となるものが学生の「大学生活」であると見なしたときに、報告者はプルーストを題材とする文学教育の可能性を意識するに至った。授業でプルーストを素材としながら、知識獲得のみならず、テキストを触媒として学生の日常的な経験に光を当て、各々の経験を文学的テーマに引きつけて意味づけることが可能となるのではないだろうか。それにより受講者は課外の日常的経験を自分なりに意味づけ、実社会で遭遇する様々な経験を分析・対処する力を獲得することとなるのではないだろうか。仮にそれらのことが可能であれば、学習者は卒業後の社会を授業内で意識することができる。そしてそのモチベーションは将来の見通しと強く関連し、溝上が問題視する「二つのライフ」が連動することとなる。これにより受講者の学業が意義づけられ、個々のモチベーションが向上するきっかけともなるであろう。

報告者は2016年度後期以降、「プルーストでトランジションを！」をスローガンとして授業改善に取り組むこととなった。以降ではまずプルーストという素材がジェネリックスキルといかにして結びつけられるかという点について具体的に説明する。その上で講義の実践報告を行い、学習者の能力開発の実例を紹介することとなる。

3. 本講義でのジェネリックスキル養成

すでに述べたようにジェネリックスキルは「リテラシー」と「コンピテンシー」によって構成される。「国際化と異文化理解」は文字通り異文化をテーマとする授業であり、本講義の題材である文学もまた多様な知識の獲得に関わるという点でリテラシーに関係する。だが報告者の講義においては受講者がフランス文化に興味を示さないため、関係知識を吸収する準備が不十分であった。実際に2016年度前期の講義では紹介したフランス文化・社会というコンテンツが学生の興味を引かなかったようである。授業評価アンケートの記述を見ると、「楽しかった」「とても熱心なのが伝わった」「おもしろい先生だったから」というコメントが目立ち、肯定的な評価ではあるものの、授業の素材に関心があることを感じさせる意見は皆無であった。

他方、2016年度後期の授業では「プルーストのテキストを手引きとしてフランスの文化・社会を紹介する」という形態を保ちながら、それぞれのテーマを学生の経験に引きつけ、自己分析を促すように工夫を加えた。すなわち文学というリテラシーに関わる素材を用いながら、受講者の過去の経験や固有の心理に関わる要素を刺激することで、内省をもたらし、コンピテンシーを高めていくことを目的としたのである。

人間のコンピテンシーを形成するのは主に「経験」であり、様々な場での他者との衝突

や協働を経て、対人基礎力（親和力・協調力・統率力）、対自己基礎力（感情制御力・自信創出力・行動持続力）、対課題基礎力（課題発見力・計画立案力・実践力）を高めることが理想とされる。このような能力が高まる単純な事例として、「部活で部長を務め、部員の不和をまとめた」「アルバイトで責任のある仕事を任され、現場の人間関係をマネジメントした」、あるいは「ゼミでは飲み会の幹事を務めた」などというものを思い浮かべることができる。このような他者との関係の構築や、自己の振る舞い方といった要素がキャリアにおいて重要となることは、一般的なエントリーシートの構成を見ても明らかである。昨今のキャリア教育が重視する課外の経験（日常生活）もまた具体的な場面での対他者関係にあると言い換えることができるだろう。

この点に目を向け、本講義ではブルーストのテキストを題材としながら、そのすべてを「自己の理解」「他者との衝突」「他者理解の試み」といったテーマに関連付け、あらゆる角度から学生の対他者経験を語らせることを心がけた。ブルーストを触媒とした経験の分析により、学生に他者との衝突が何によってもたらされるかを理解させ、問題解決の道を模索させることで、対人基礎力・対自己基礎力の向上をもたらしことが2016年度後期以降の本講義の目的となっている。加えて、自分の経験の意味を言語化する過程で、リフレクションシートやレポートでの文章トレーニングを集中的に行う。これは学生が高校までに培った国語力を増強し、他者に自分の考えを伝えることを目指すものである。すなわち本講義のトランジションとは、受講者の現在に至るまでの国語力と経験を素材として、他者と社会で生きる力を養うことを意味する。

本講義の2017年度のシラバスと各回のトピックは以下の通りである（下線強調は報告者による）。

【授業概要・方法等】

この講義は20世紀フランスの小説家、マルセル・ブルースト(1871—1922)の『失われた時を求めて』を手引きとして進めますが、決して「小説を読むだけ」の授業ではありません。講義では小説に描かれる絵画・音楽・建築・社会問題など、近現代フランスのいろいろな文化を紹介します。文化にはその時代を生きた人々の経験が反映しています。この講義では、受動的に知識を得るだけではなく、近現代フランス文化の紹介に合わせ、異質な文化圏を生きる我々自身の経験との共通点を探りましょう。授業中にはコメントカードやグループディスカッションを利用して、皆さんの印象を言語化し、他者に伝える練習もしていきます。この学習を通じて、異文化についての教養を高め、国際社会を生きる上での基礎的な能力を獲得することを目指しましょう。

【学習・教育目標および到達目標】

講義では近現代フランス文化の基礎知識を得るとともに、様々な文学・芸術作品のテーマを自分自身に照らし合わせて分析する能力が身につきます。それにより、受講者は各々の経験から何らかの意味を取り出し、言語化して他者と共有する力を獲得することができるようになります。

シラバスでは「キャリア教育との結びつき」についてはとりたてて強調していないが、本講義が「小説を読むだけの授業ではない」ということを指摘し、自分の経験との重ね合わせや他者との協働といった主題を明確化している。

初回講義では、各回で取り扱うトピックと関連テーマをまとめたスケジュール表を配布する。

- 第一回 イン트로ダクション——プルースト、その人生と作品
- 第二回 記憶の問題 ※テーマ「私たちの記憶とは？」
- 第三回 フランス絵画 ※テーマ「私たちの印象とは？」
- 第四回 フランスの教会建築 ※テーマ「私たちにとって宗教とは？」
- 第五回 恋愛について ※テーマ「人と分かり合うことは可能か？」
- 第六回 恋愛について Part II ※テーマ「人を愛するためには？」
- 第七回 フランスの同性愛 ※テーマ「マイノリティ問題を考える」
- 第八回 ワークショップ
- 第九回 オリエントの魅力 ※テーマ「排他主義？オリエンタリズム？」
- 第十回 夢と現実 ※テーマ「私たちの現実とは？」
- 第十一回 フランスの音楽 ※テーマ「私たちの個性とは？」
- 第十二回 フランスの科学技術 ※テーマ「私たちの時代とは？」
- 第十三回 フランスと日本 Part I ※テーマ「異文化を理解できるか？」
- 第十四回 戦争 ※テーマ「私たちの敵とは？」
- 第十五回 フランスと日本 Part II ※テーマ「私とは何か？」

このようにプルーストの重要な主題を各回のトピックとするが、「テーマ」と付記している部分に着目してもらいたい。それぞれの主題を具体的なテーマに基づいて一般化し、学生の経験を引き出すことを目的としている。

自他の衝突から他者理解に至る経験についての考察を深める本講義において、取り扱うテーマは自己・アイデンティティに関わる問題と、自分と異なる他者の捉え方に関わるも

のに二分される。

前者の代表として、文化的主題が「フランス絵画」である場合を例に取る。一般的な教養課程の講義でこのようなタイトルがつく回は、絵画史の紹介・作品鑑賞・作品分析といった内容が主流となるだろう。本講義でもパワーポイントで16世紀以降の絵画作品の紹介を行うが、絵画作品に合わせてプルーストのテキストを紹介する。たとえば卑近な事物の静物画を選んだシャルダンの絵画を鑑賞させた後にプルーストの文章を紹介し、事物を眺める人間の内面的な「印象」というテーマに肉薄する。「印象」というテーマが抽出された後、グループ単位で卑近な事物に親しみを見出した経験を語り合ってもらう。この手順により、学生は自分の抱える「印象」が唯一無二のことであることを実感し、それを他者に伝えることの困難さを理解することとなる。同様の自己分析は記憶、音楽、夢想といった個人の主観性に関わるテーマでも行わせることが可能である。すなわちこれらは自己の特殊性を自覚する試みと言い換えることができる。

後者、すなわち他者の捉え方に関わるものとしては恋愛のテーマが挙げられる。この回ではフランス文学の恋愛の記述をたどりながら、プルーストの嫉妬の主題を触媒として、学生自身の欲望がいかに発生・持続するかを自己分析してもらい、恋愛という主題を通して他者理解の困難さを改めて実感してもらい、その状態からいかにして漸進するかを学生自身に考えてもらう。同性愛、オリエント、戦争といった他者との衝突に関連するテーマに関しても、同様の議論の素材とすることが可能となる。

このように、本講義では文化的主題を漫然と提示するのではなく、プルーストの文章と重ねることで、学生が自分の経験を思い起こし価値づけできるよう促していく。その上で自身の経験を言語化し、他者に伝えることを最終的な目的とした。本講義ではアクティブラーニングによる定期的なグループディスカッション、毎回のリフレクションを導入し、学生が経験を言語化するトレーニングを継続的に行う。以上の試みにより、学生は自己の特殊性を自覚した経験や他者と衝突した経験を言語化する作業を、他の受講者という自己と異質な他者との協働によって遂行していく。このように、過去から現在に至るまでの自己・他者を意識させ、他者との協働を可能とする力を身につけることが本講義でのジェネリックスキル養成となる。

授業はすべてアイスブレーキング→講義→経験の価値付け→ディスカッション→リフレクションの順で進めていく。第八回講義ではグループプレゼンとレポートを実施する。レポートを添削指導し、また通常授業を繰り返す。最後に小論文型の期末試験を実践し、自分の経験を言語化する能力の向上を目指す。

4. 実践例

これまで報告者が担当した「国際化と異文化理解」は、収容数 144 人の大教室で行っている。これまでの受講人数は以下の通りである。

2016 年度前期：26 名

2016 年度後期：21 名

2017 年度前期：26 名

2017 年度後期：43 名

このうち、大規模な授業改善を行ったのは 2016 年度後期である。一度落ち込んだ人数が 2017 年度前期に微増し、後期にはほぼ倍増していることから、2016 年度後期の授業改善は一定の効果があったのではないかと考えられる。

以下、講義の構成に従って実践例の説明をする。特に説明のないものは 2016 年度後期に取り入れた改善である。

①アイスブレイキング（グループ作成）

本講義では「他者との協働」が何よりも大きな意味を持つ。そのためグループワークを導入し、受講者同士が意見交換や議論をする環境を作らねばならない。2016 年度前期当初は学生を自由に着席させ、必要に応じて「近くに座っている人とペアを作り、ディスカッションをしましょう」と促したが、無視・無反応が頻出する。このような指示は、「ペアを作ること」と「ディスカッションをすること」という異なる行動を一気に促そうとするものであり、指示を聞く側が行動を躊躇してしまうということに思い至った。そこで 2016 年度後期からアイスブレイキングを導入し、授業の開始時に学生に強制的にグループを作らせることで、二つの指示を分離した。まずペアを作りに集中させ、その後で「自己紹介・受講理由・昨夜は何を食べたか」などについて学生同士の会話を促し、緊張状態をほぐすことで、講義の中でディスカッションを行う環境を整える。

しかしこれを効果的に行うにはいろいろな工夫が必要となる。報告者はこの二年間で三度の改善を行い、現在の形にたどり着いた。

【2016 年度後期：学生の意思に任せたグループ作成】

学生の着席順に前方へとつめさせ、隣と 2 人のグループを作る。学生の意思を尊重したグループ作成だが、一般に学生は毎回同じところに着席しようとするため、グループに大きな変化がない。また友人同士で着席するグループも多い。そのため馴れ合いが生じ、無視や無反応の状態が生じる。

【2017 年度前期：シンク・ペア・シェアの導入】

グループ作成の仕方はこれまで通りとして、発話を促すためにシンク・ペア・シェアを意識した。これはまず受講者が一人で考えをまとめ、一定の時間が経ってから隣と議論をする、というものである。これであれば教員の合図で一斉に議論が始まるため、無視・無反応の改善に繋がる。しかし毎回のグループがほぼ固定されるため、徐々に手を抜く学生が現れる。グループを毎回変更する必要性が感じられた。

【2017 年度後期：小グループでのリーダー制】

講義の初めに受講者をナンバリングして、4～5 人のグループに分ける。その上である基準に従ってリーダーを選出する。これにより毎回違うグループで、リーダーも別の学生が担当する。このグループでリーダーを基準にして会話をさせると、他の学生に対しての責任が生じ、学生のモチベーションが維持される。ただし積極性を見せるグループの中で、消極的な態度を取り他に依存する学生が見受けられるため、今後の改善が必要とされる。

②アイスブレイキングと学習テーマの結びつけ

アイスブレイキングでは何気ない会話をさせる一方で、その会話内容が当日のテーマと通底し、最終的にプルーストのテキストを通じて意味づけられるように工夫した。たとえば「プルーストと教会」のテーマでは「子どもの頃にお寺や神社で遊んだ思い出」を話してもらおう。これは「寺社・仏閣」を巡った経験を引き出すことで、宗教建築に対する態度を考えてもらう下地となるとともに、プルーストのコンブレーの教会に代表される「親しげな教会に対する態度」と自身の経験を比較するための準備となる。

③プルーストのテキストの用い方

【例：教会の描写】

教会を扱う回では、フランスの大聖堂の写真をスライドで見せ、次いで『失われた時を求めて』のサン＝ティレール教会のモデルと言われるイリエ＝コンブレーのサン＝ジャック教会と見比べてもらう。サン＝ジャック教会が大聖堂に比べてやや小さめであることを確認させた後、プルーストのテキストを比較する。

叔母がフランソワーズとおしゃべりしているうちに、私は父母に連れられてミサに出かけるのだった。どれだけ愛したことか、そして今なお鮮明に思い出せるだろうか、私たちの教会を！ 私たちが入ってゆく古い玄関アーチは、黒く、穴杓子のように

にあばた顔で、大きくたわんでおり、角という角は深くえぐれていた（入口におかれた聖水盤も同様である）。教会に入ってくる田舎娘たちの柔らかく膨らんだマントが触れ、聖水をためらいがちに掬おうとする指が触れ、何世紀もの間それが繰り返されたことで、事物を破壊するほどの力となり、まるで境界石に馬車の車輪が毎日ぶつかって跡をつけるように、ポーチの石はすっかりとたわみ、いくつもの溝が穿たれるのだ。〔…〕 教会！ 親しげな教会。それは北門があるサン＝ティレール通りで、その二つの隣人であるラパン氏の薬屋とロワゾー夫人の家の境となり、間隔なく接している。〔…〕 ロワゾー夫人が窓辺にフクシアを置き、それがつねにどこにでも頭を下げて枝を走らせる悪い癖をつけ、その花が何よりもまず、大きくなると、その紫色に充血した頬を教会の暗いファサードで冷やそうとして押しつけても、無駄であった。フクシアはそのため私にとって聖なるものにならなかった。花とそれがもたれかかる黒い石の間には、私の目が隔たりを知覚しなくても、精神が深遠を保っていた。⁸

以上の引用で、田舎町の古びた教会が、決して絢爛豪華さを誇るものではなく、親しさや懐かしさといった要素によって特別なものになっていることを確認する。ここで学生に冒頭のアイスブレイキングのディスカッションを思い出させ、必ずしも重要な文化財とは言えない身の回りの寺や神社に幼少期の大切な思い出が潜んでいることを自覚させる。万人向けの美しさを誇るものではない建築物に美や親しみを感じるという体験を軸に、各人の印象がそれぞれ異なっていることを指摘する。加えて、その固有の印象を異文化圏の我々に伝えるプルーストの文章を改めて読解させることで、他者に向けて独自の印象を言語的に説明することの重要性を意識させる。

④ 2017 年度前期：リフレクション

知識の定着や関心の持続をはかるため、2017 年度前期にリフレクションペーパーを導入した。当初は「講義の内容を振り返り、次回のテーマについて予習的に書いてくる」という宿題形式であった。講義外で言語化を習慣づけるトレーニングのつもりであったが、当日の講義前に作成する学生が頻出し、本来の意図と異なる使われ方が目立つようになった。そこで 2017 年度後期では「授業後にその場で作成するリフレクション」に切り替え、当日のテーマに合わせてワンテーマの作文を課すことにした。たとえば上記の教会の回であれば「本来は異質なものである教会と寺が「親しさ」という点で繋がる、といったように、異文化と自文化の間に繋がりを見出すことができる例（あるいは見出した経験）を教えてください」という出題になる。回収したリフレクションペーパーには所見を書き加えて翌週に返却し、フィードバックとする。

⑤小論文

この講義のもっとも重要なタスクであり、中間レポートと期末テストで構成される。本講義では事実上、中間レポートが「練習」となり、教員の添削を受け、期末テストで改めて類似した論述課題に取り組む、という順序になる。ここでは主に講義で学んだ自己の特殊性や他者理解の困難さを題材として、自分自身が他者と共存するための方法を考えてもらう。

書き方・採点基準はあらかじめ受講者に提示する。例としてこれまで使用した問題と実際の解答を挙げる。

【実際の期末試験の問題】

現代社会においてフランス文化を学ぶことにはどのような意味があると思いますか？ 講義で扱ったフランス文化を何か一つ選び、あなた自身がどのような問題にどう役立てるかという観点から 600 字以上 800 字以内で論述しなさい。

小論文では経験の記述と分析を必須として課す。また達成度よりも学生の修練に主眼を置くため、採点基準は予め学生に提示する。

【基準】

主題の明確さ……主題がはっきりしているか
 首尾一貫性……論文で主張が一貫しているか
 具体性……エピソードがしっかり書けているか。リアリティはあるか。
 論理性……分析がしっかりできているか。無理はないか。
 文章表現……日本語のミス、誤字はないか。

【実際の解答例】

私は現代社会において、プルーストの作品を学ぶことが、「境界の消失」につながることで、対立をなくすことにもなると考える。

私は大学で学ぶにおいて、部活という組織に所属し、活動を行っている。しかし、組織である以上、他の組織との対立関係に置かれることもある。その原因の大半は意見の違いにある。〔…〕

この問題の解決にプルーストの主張こそ重要であると私は考える。プルーストは自らの作中、中でもカルクティエ港の描写において、境界線の消失を主張している。境界線が消失してしまえば、もちろん差異など存在せず、二項対立など成り立たない。

プルーストはそれを、難解な哲学書や過去を学ぶ歴史書ではなく、文学によって、我々の感性を通して教えてくれるのである。

この答えは『失われた時を求めて』の架空の画家エルスティールの海洋画の描写の特徴に目を向け、自身の周囲の人間関係の問題解決に繋げた解答例である。本講義において報告者は、海と陸が区別なく繋がっているような錯覚をそのまま作品化した海洋画の描写を紹介した。その際に注目したのは、景色を眺めるものに固有の「印象」のテーマである。講義では本来は別個のものである海と陸を、先入観を取り払って事物を眺めることにより、まるで水陸が一体化しているように感じられる瞬間を描写した場面を紹介し、受講者の固有の「印象」をめぐるディスカッションを提示した。上の解答者は、人間同士の対立を先入観のない視点で捉えることで、不要な対立が繰り返されていることを察知し、エルスティールの海洋画の描写に注目して「境界線」のない人間関係を構築する必要性を主張している。答えはやや説明不足ではあるが、文学作品のエッセンスを実人生の具体的な問題に当てはめていくという姿勢を読み取ることができるだろう。

5. これまでの成果と今後の課題

報告者は「プルーストでトランジションを！」という目標のもと、授業デザインを行い、問題が生じた場合は次semesterで改善を心がけるなど、様々な改良を加えてきた。結果的に本講義での学生のモチベーションは高まり、鋭い反応が見受けられるようになった。2016年度後期のアンケートは以下の通りである。

- 話がおもしろくて、聞きやすかった。例えがとても理解しやすかった。
- 授業内容は難しかったけれど、生徒に伝わるようにおもしろく分かりやすく工夫されていた。
- 興味を持てるような授業だった。
- 話し方がうまく、笑いのたえない授業で、毎週楽しみだった。前の方で、距離も近く、しっかり授業に参加しているという意識ももてた。

2016年度前期との一番大きな違いは「興味を持てる」「例えが理解しやすい」「生徒に伝わるように〔…〕工夫されている」というところであろう。学生の自分の体験を軸にした講義を展開したことに興味を覚え、理解しやすさを感じたということが推察される。

この方式を踏襲した2017年度前期のアンケートもこれを裏付けている。

- 非常にわかりやすく、資料もすごくていねいで、授業内容について興味を持てるような授業だったから。
- 授業時の先生の行動や言動などからその日の講義がより分かりやすくさらに興味を持つことが出来たしずっと座って話を聞くだけじゃなくて問いかけてくれたりしたのでとても楽しく受けられました。
- 今まで気になっていた同性愛、差別、日本と海外の文化性の違いがよくわかって、とても良い授業であったと思う。来年もできればうけたいぐらいだ。
- 一定の授業としてあるべき雰囲気を保ちながらも、興味・関心を惹くような授業がずっと展開されていたから。

これらのアンケート結果に特徴的なのは、「興味」「関心」という言葉であり、2016年度後期と同様に学習内容への関心が高まっていることが理解できる。またディスカッションなどの試みが学生のモチベーションに寄与していることも推察できる。

リーダー制を導入し、集団でのディスカッションを強化した2017年度後期のアンケートの自由記述では以下のような意見が多かった。

- グループワークが多くてよかった。
- みんなで話し合う機会が多々あるから楽しく授業を受けれている。
- グループディスカッションがあって、そこで意見を交換するためにきちんと授業に参加しなければ、と思うようになった。意見を述べる場を作るのはいいことだと思う。

このようにディスカッションによる意見交換の重要性が学生に浸透してきている。これらの結果により、プルーストの文学世界を自分の経験に引きつけることで興味を増進すること、自分の意見を他者と共有することでモチベーションを高めること、といった効果ははっきりと確認できる。

他方、アンケート結果では満足度やモチベーションの高さが覗える方で、自由記述欄にキャリア意識との繋がりを実感したという記述を見つけることができなかった。この講義では、教養課程ではジェネリックスキルの中でもさらに基礎的な能力に焦点を当て、講義の実践において「経験を意味づけ、他者理解を図り、言語化する」という極めてベーシックな目標を設定しているため、学生自身がキャリア教育との繋がりを見出しにくいかもしれない。

また、講義の総合評価に関わる設問「この教員の授業を10点満点で評価してください」の平均点は以下の通りである。

2016 年度前期：9.4

2016 年度後期：8.9

2017 年度前期：9.1

2017 年度後期：8.7

このように、授業改善前の 2016 年度前期の評価点がもっとも高いのである。2016 年度後期以降の授業改善で、学生にペアワークを行わせるなど、受け身の授業を極力避けていることが評価減に繋がっている可能性がある。とはいえ全体的に高評価を維持しているため、授業の取り組み自体は学生に評価されていると考えられる。

その他の課題として、大学四年間のカリキュラムにおける本講義の位置づけを十分に検討せねばならないと感じている。本講義は、学生が備えている「経験」を意味づけ、大学入学まで培った国語力を増強させるとともに、コミュニケーション力の向上を図ることでジェネリックスキルを養成することを目的としている。しかし本講義の時点で身につけた能力が受講者の後の学習に発展し、大学四年時でキャリア教育が完成する、という見通しは持てずにいる。その大きな原因は他の授業や専門科目との関連である。この辺は各科目でディプロマポリシーとの関連性を入念に行い、カリキュラムマップを明確に作成した上で、他の教員と連帯する必要がある。本学ではシラバスでディプロマポリシーとの関連付けを行うことが義務づけられているが、教員間の連帯はまだ十分だとは言えない。

また、本来は「プルーストで学ぶフランス文化」という目的で計画した講義内容を「プルーストでトランジションを！」という目標にシフトしたため、全 15 回の講義に連続性が欠けている。各回のテーマは自己理解・他者との衝突・他者理解に関係するものであるが、それぞれが全 15 回の中で単発の講義で終わってしまい、全体を通じてのストーリーが欠如しているのである。それゆえ 2018 年度は各回の順番を入れ替え、全 15 回で段階的に「自己理解」から「他者との共存」へと向かうストーリーを明確化した。この改善による成果報告に関しては別稿に期したい。

注

- 1 高橋梓、「現代の大学教育の課題とフランス文学教育の可能性」、神戸大学シンポジウム「フランス文学を次世代へいかに伝えるべきか」、2016 年 12 月 28 日。
- 2 以上の調査は溝上の講演「10 年間の大学生研究フォーラムを振り返って」（2017 年度大学生研究フォーラム）で報告された。また調査の分析については溝上『源田医大学生論』（日本放送出版協会、2004 年）、『大学生の自己と生き方』（ナカニシヤ出版、2001 年）を参照。

- 3 溝上、同講演。
- 4 松下佳代、「大学から仕事へのトランジションにおける＜新しい能力＞」、溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション』（ナカニシヤ出版、2014年）、pp.97-99。
- 5 <http://www.kawai-juku.ac.jp/prog/point.html>
- 6 中原淳、「「経営学習研究」から見た「大学時代」の意味」、中原淳、溝上慎一編『活躍する組織人の探求 大学から企業へのトランジション』（東京大学出版会、2014年）、p.39。
- 7 高野良一、「学部カリキュラムの考え方と全体像」、金山喜昭、児美川孝一郎、武石恵美子編『キャリアデザイン学への招待』（ナカニシヤ出版、2014年）、pp.103-104。
- 8 Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu, tome 1*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1987, p. 58-62. 下線強調は報告者によるものである。講義中のハンドアウトにも同様の下線を引いている。